遲ク參テハ我勘當蒙リナントテ、怖ヂ騷セ給ツレバ、事ニモ候ヌ事也トテ、男共ニ召仰候ツレバ、立所ニ例樣ニ成セ給テ、其後烏ト共ニ參リツル也ト、利仁此ヲ聞テ頬咲テ五位ニ見合スレバ、五位奇異ト思タリ、物ナド食畢テ急立テ行程ニ、暗々ニゾ家ニ行著タル、此見ヨ實也ケリトテ、家ノ内騷ギ喧ル、○中略而ル間向ヒナル屋ノ檐ニ狐指臨キ居タルヲ利仁見付テ、仰覽ゼヨ昨日ノ狐ノ見參スルヲトテ、彼レニ物食セヨト云ヘバ、食ハズルヲ打食テ去ニケリ、

〔古今著聞集二十魚虫禽獸〕承平の比、狐數百頭、東大寺の大佛を禮拜しけり、諸人これを追ひければ、その靈人につきていひけるは、欠しく此寺にすむ、今尊像をいたましめやかんとするが故に、禮拜をいたす也とぞいひける、

〔日本紀略六圓融〕天祿三年二月四日乙丑、今日狐百餘頭鳴陣内、

〔日本紀略十一條〕寛弘二年九月十六日辛酉、御ト、東大寺言上、去月十三日、白鷺烏與狐爭鬪、幷大佛殿内如闇夜、大佛面幷軀汗出之故也、

〔今昔物語二十五〕春宮大進源頼光朝臣射狐語第六

今昔三條院ノ天皇ノ春宮ニテ御坐ケル時、東三條ニ御坐ケルニ、寢殿ノ南面ニ春宮行カセ給ヒケルニ、西ノ透渡殿ニ殿上人二三人許候ケリ、而ル間辰巳ノ方ナル御堂ノ西ノ檐ニ、狐ノ出來テ臥シ丸ビテ臥セリケルニ、源頼光朝臣ノ春宮大進ニ候ケルニ、此レハ多田ノ滿仲入道ノ子ニテ極タル兵也ケレバ、公モ其道ニ仕ハセ給ヒ、世ニモ被恐テ士有ケル、其レガ其ノ時ニ候ケルニ、春宮御弓ト、ヒキメドヲ給ヒテ、彼ノ辰巳ノ檐ニ有ル狐射ヨト仰セ給ケレバ、頼光ガ申ス樣、更ニ否不射候ハジ、異人ハ射□シテ候フトモ弊クモ不候、頼光ニ至テハ射□候ヒナム无限リ耻ニ可候シ、然リトテ射宛候ハムニ於テハ可有キ事ニモ不候ハ、若ク候ヒシ時、自然ラ鹿ナドニ罷合テ、墓墓シカラヂドモ射候ヒシヲ、今ハ絶テ然ル事モ不仕候ハヂバ、此ノ樣ノ當物ナドハ、今ハ箭ノ落